

存在のあり方を表す副詞的表現の日中対照研究 —「点々」を例に—

筑波大学大学院 蔡嘉昱

1 はじめに

日本語において、「点々」が「ものがあちこち散在している」という意味で使用されている。ものの内的属性を修飾するものとやや異なり、「点々」は存在によって、付与されるサマを表している。中国語でも、“点点”（以下、中国語の“点点”は“”で括って表記し、日本語は「」で括って表記する）も小さいものが空間内に多く存在していることを表し、日本語と同じ、存在のあり方の表現だと考えられる。

しかし、現代日本語において、「点々」は副詞として使用されている一方、中国語において、一般的に“点点”は副詞の位置に立たない。

(1) 現に白帆が海面に点々と浮かんでいる。『あした蜉蝣の旅』

(2) 五百里滇池烟波浩渺，云蒸霞蔚。湖面白帆点点，鸥飞燕舞。

下線部：湖面にある白帆が点々であり

このように、日中両言語において、存在のあり方を表す表現について、異なる用法が見られている。このため、本稿は、「点々」を例に、日中両言語における存在のあり方に関する表現に注目し、コーパスから収集される用例に基づき、意味、用法、コロケーション、の3方面から比較・分析するものである。

2 研究方法

日中両言語における「点々」の使用状況を比較するために、本稿では、「北京大学中国語言中心コーパス」（通称 CCL、以下 CCL という）¹と「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（以下、BCCWJ という）の両コーパスを利用することにする。

検索条件は以下の通りである。

(3) CCL:

検索条件：(点点)~0(一) (点点)-0(头)²

資料庫：現代中国語資料庫

(4) BCCWJ:

検索条件：語彙素 点々

資料庫：全資料庫

CCL で検索したところ、10996 例が見られる。そのうち、(5) (6) (7) のような例外が見られる。(5)における“点点”は“点点头”という動詞の一部で、“点头”（うなずく）という動作を複数回やることを指している。(6)における“指指点点”は“指点”から派生するものであり、「指差す」という動作を複数回やることを意味している。(7)における“一点点”は“一点”（「少ない」の意味で使用されている）から派生し、「極めて少ない」の意味で働いている。これ

¹ CCL コーパスの現代語部分は 581,794,456 字がある。雑誌、新聞、文学作品、白書から用例を抽出している。

² “点点”が使用される用例のうち、“一点点”と“点点头”のような例を除いた検索式である。

らの例における“点点”は、ほかの語から派生するものが多いため、今回の考察に例外として扱われている。

(5) 穷人和政治家听了，都微笑着点点头……

(6) 我害怕有朝一日自己真的变成影帝时，嫉妒我的人指指点点，媒体越来越放肆，保不准哪一天就上了娱乐报的头版头条。

(7) 作为刘招华这么狡猾的人，有一点点风声都可能把他惊跑了。

このように、本研究は、CCL から収集された用例において、1491 例を分析対象としている。コーパスの規模を考えると、百万語あたりの用例数は 1.27 例である。日本語の場合、BCCWJ で検索したところ、307 例が見られるが、分析対象としているのは 276 例である（「点点」の使用例ではない例が 31 例ある³）。百万語あたりの用例数は 2.47 例である。全体的に、日中両言語で「点々」

（“点点”）の使用頻度は高くないと考えられる。

3 存在のあり方を表す「点々」

3.1 中国語の場合

中国語の辞書（『漢語大辞典』）において、“点点”には「少ない。小さい」と「空間に小さいものが多く存在している」の 2 つの意味が見られる。

(8) 受这点点委屈就甩挑子不干了？（莫言『红树林』）

下線部：ちょっとつらい思いをする

(9) 你怎么只吃这点点东西？（罗广斌『红岩』） 下線部：少ないもの

「少ない。小さい」の意味で使用される例は、(8)(9)である。(8)における“点点”は、「小さい」の意味で使用され、程度を表している。(9)における“点点”は、「少ない」の意味で用いられ、数量を表している。このように、「少ない。小さい」の意味で使用される“点点”は、空間内に存在している様子、あるいは、存在によって付与される状態と関係していないと考えられる。このため、「少ない。小さい」の意味で使用される“点点”は、本稿の対象から外している。「点。複数の点」の意味で使用されるものも、4 節の分析対象から外している。本稿で、計 949 例を抽出した。

949 例のうち、他の疊語と共起している形で使用されるのは、335 例で、他の疊語と共起していないのは、614 例である。しかし、他の疊語と共起していない用例のうち、(10ab)のような、特別な形を持っている用例も見られる。

(10) a 云天明弯腰抓起一把黑土，让土从指缝慢慢流出，下落的黑土闪动着点点晶光…（刘慈欣『三体』）

b 照片粗看一片黑暗，细看有星光点点…（刘慈欣『三体』）

(10ab)における「点点晶光」と「星光点点」は、前語基と後語基の間にある助詞（“是，的”）が省略され、「A+N」と「N+A」の構造を持っている。形から、中国語における“点点”は、①疊語共起型、②熟語型、③単独型の 3 型に分けられる。

3.1.1 単独型

³ 人名として使用される用例など

4.1 節に述べているように、現代中国語において、単独型の“点点”が少ない。そのうち、連体修飾語として働く“点点”は圧倒的に多く(66 例)。連用修飾語として使用される用例は少ない(11 例)。

日本語と異なる点は、中国語における“点点”は存在しているものの位置関係が指定されていない(日本語のように、あちこちに散在している状態を表現できる一方、並んでいる状態でも表現できる)。連用修飾語として働く用例のうち、「落ちる類」と「光る類」の2種類に分けられる。

(11) a 阿朱吓得泪水点点地从颊边滚下。(『天龍八部』)

b 观众入场时便沐浴在点点闪烁的“星光”下…(『新華社』)

c?阿朱吓得点点泪水从颊边滚下。

d 观众入场时便沐浴在闪烁的点点“星光”下

「落ちる類」は「下に落ちる」という意味をもつ動詞を修飾している((11a))。“点点”は落ちた後のものの位置関係ではなく、落ちていた瞬間に涙や汗の滴が小さくて、たくさん存在していることを表している。「光る類」は「光る」「輝く」の意味をもっている動詞を修飾している((11b))。“点点”は輝いた後のものの位置関係ではなく、輝いている期間内に星が小さくて、たくさん存在していることを表している。つまり、連用修飾語として働く“点点”は、①動きの最中のものの様子(小さい)、②動きの最中のものの存在のあり方(多い)、が表現できる。

「同時複数性」と「時間的継続性」から、「光る類」と「落ちる類」の“点点”の違いが見られる。「落ちる類」の“点点”は、一瞬のうち複数のものが存在していることを表している一方、小さく多いものが次々と出現すること(涙や汗など)も表している。つまり、「落ちる類」の“点点”は、時間枠の中で捉える一方、「光る類」の“点点”は時間枠の中で捉えることができない。このため、「光る類」の“点点”は、「落ちる類」の“点点”と異なり、動き方を表している表現として解釈しにくい。このように、“点点”の移動が見られる(11d)の許与度は(11c)はより高い。

連体修飾語として使用される“点点”は、小さいものが空間内に多く存在していることを表している。

(12) a 观众几万只手电筒的光芒,如同夜空中点点的繁星闪烁。

下線部: 点々な星(『新華社』)

b 唯有斯人面上簌簌流下的,是点点无声无形的热泪(『読書』)

c 点点的遥山,淡得比初春的嫩草,还要虚无缥缈。

*d 遥山,点点地淡得比初春的嫩草,还要虚无缥缈。

(12a)(13b)は、それぞれ連用修飾語の「光る類」と「落ちる類」に対応し、「落ちていた」「光っている」ものを修飾している。(以下、「光る類—連体」「落ちる類—連体」という)。両方とも、①動きの最中のものの様子(小さい)、②動きの最中のものの存在のあり方(多い)を表している。

(12c)は、連用修飾用法に見られる用法である。「落ちていた」もの、あるいは「光っている」ものではなく、ものがどのような様子で存在しているのかを表している。動きがあるものを修飾していないため、連用修飾の位置に移動することはできない(以下、「存在類」という)。

連体修飾語として使用される用例には、「光る類—連体」に属するものは24例で、「落ちる類—連体」に属するものは10例である。一方、「存在類」は32例である。「光る類—連体」が「落

ちる類一連体」より多いことは、「落ちる類一連用」の許与度が「光る類一連用」より高いことと関係している。連体修飾語として使用される“点点”について、①連用修飾として使用される頻度より高いが、多く使用されていないこと、②“点点”は動きの最中のものの様子（小さい）と動きの最中のものの存在のあり方が表れる一方、空間内に存在するものの様子と存在のあり方が表現できること、③連体修飾語の場合、空間内に存在するものの様子と存在のあり方を表現している用法は最も使用されやすいこと、の3点が見られる。

3.1.2 熟語型

(13) a 繁星点点的穹顶见证了这庄严的一刻 b 点点繁星的穹顶见证了这庄严的一刻

(14) a 点点白帆穿插其间，倒也不乏悦人之美

b 白帆点点穿插其间，倒也不乏悦人之美

熟語型の「○○点点」と「点点○○」は、“点点”の順番が異なるが、「点点+名詞」の形が維持されている。このため、(15ab) (16ab)に示されているように、“点点”の位置が変化しても意味と関係していない。

熟語型に属する例は計 534 例がある。そのうち、“繁星”“白帆”“灯火”“烛光”“星光”“渔火”“灯光”“帆影”“渔帆”と共起するものが多く、41.6%を占めている。繁星”“灯火”“烛光”“星光”“渔火”“灯光”は「光る類」であり“帆影”“渔帆”“白帆”は「存在類」である。そこから、現代中国語における“点点”は、限られた対象を修飾していると考えられる。熟語型は連体修飾語、述語として使用できるが、連用修飾語として使用されることはできない。

3.1.3 疊語共起型

疊語共起型に属する例は計 335 例がある。そのうち、連体修飾語として使用されるものは 180 例で、述語として使用されるものは 86 例である。一方、連用修飾語として働くものは 69 例である。

図 1 のように示されるように、疊語共起型は 335 例があるが、“星星点点”“斑斑点点”に集中している。(15a)は述語として使用される用例で、(15b)は連体修飾として使用される用例である。一方、(15c)は連用修飾語として用いられる用例である。

(15) a 只因怀孕生子，光洁的脸上现出了孕妇难免的“妊娠斑”，星星点点，若隐若现，孩子出生许久还未消退。

b 紧接着，在通往希望小学的乡间小道上，亮起了星星点点的手电筒灯光。

c 众多美丽的小岛星星点点地散落在碧波万顷的海面上。

d 星星点点的众多美丽小岛散落在碧波万顷的海面上。

他の疊語と共起することで、「存在類」にも連用修飾として働く用例が見られるようになっている((15c))。これらの“点点”が存在表現（例えば、「散布、散在」の意味で使用される“散落”）にかかるが、名詞の前に移動することは可能である。このように、動詞の前に出現する“点点”が動き方ではなく、ものが存在によって付与される状態（多い）を表現している

表 2 に示されるように、①疊語共起型では、存在類の出現頻度が高くなっていること、②単独型より連用修飾用法が使われやすくなること、③単独型にない述語用法が、疊語共起型に多く見られること、④「落ち類」に連体と連用の数がほぼ同じであるが、「光る類」「存在類」に連体の数は大幅に連用の用例数を超えていること、の4点は見られる。

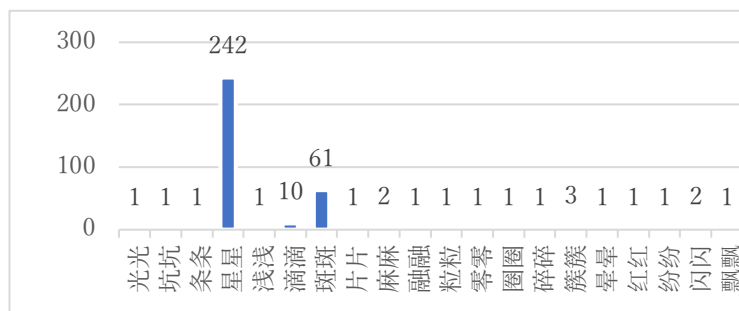


図1 疊語共起型の共起について

表2 疊語共起型の意味用法⁴

	光る類	落ちる類	存在類
連体	37	14	127
連用	11	17	40
述語	25	14	47
総計	73	47	213

「光る類」「存在類」に連体の数は大幅に連用の用例数を超えていることから、「光る類」「存在類」の“点点”は連体修飾語として働きやすいことは分かる（理由は、4.1.1節）。しかし、「存在類・光る類」（特に、存在類）に連用修飾語として働く用例が出現する理由は、複数の連体修飾語を避けるからである（「存在類・光る類」に連用修飾語として働く用例を調査した結果、ほぼ全ての用例が別の連体修飾語を持っている）。

3.2 日本語の場合

『日本国語大辞典（第二版）』には、「点々」について、次のように述べている。

- ①(一する)(形動タリ)点をうったように、あちこちに散在すること。また、そのさま。
- ②いくつかの点。また、俗に点線をいう。

BCCWJ から抽出した用例は276例である。表3は、意味、用法、形式の3方面から整理するものである。日本語において、単独型のみ見られる一方、熟語型と疊語共起型が見られない。

表3 日本語における「点々」

		あちこちに散在すること	複数の点
被修飾語			54
連体修飾	タル	1	
	トスル	2	
	トシタ	0	
	トシイテイル	4	
	トシテイタ	1	
連用修飾	ト	205	
	トシテ	1	
	φ	2	
述語	ダ	0	
	トシタ	0	
	トシテイル	3	
	トシテイタ	3	

⁴次の用例において述語としての理解ができる一方(b)、連用修飾としての理解もできる(c)。今回の分析において、次のような「名詞+○○点点+動詞」の形を持っている用例も連用修飾用法の用例として扱いたい

a 这里的墓园星星点点密布于山坡上。b 这里的墓园星星点点, 密布于山坡上。

c 这里的墓园星星点点地密布于山坡上。（計4例ある）。

表3に見られるように、存在のあり方を表す「点々」は、BCCWJにおいて、222例が見られる。一方、「いくつかの点」の意味で使用される用例は54例である。本稿において、「あちこちに散在すること」の意味で使用される222例を中心に分析する。

日本語における「点々」の殆どは連用修飾語として使用される用例である。述語として使用されるものは、6例がある一方、連体修飾語として使用される用例数は7例である。そのうち、タル型は1例のみ見られる。

(16) 余は空に黄昏の微光さまよひ燈火の点々たる時此の紐育に望む事を愛す

『荷風とニューヨーク』

このように、中国語と異なり、連用修飾用法は主な用法であることがわかる。また、中国語において、“点点”が修飾する語は「小さい」という素性を持たなければならない（例えば、(15c)において、島が小さいものではないが、海に囲まれている島は小さい）。しかし、日本語には、このような制限がみられない。

連用修飾語として使用される「点々」について、中国語と異なって、「走る」や「浮かぶ」や「這っている」などのような数多くの動詞と共起できる。

(17) 青白い水銀灯が、その間をぬって点々と走り……（『首都消失』）

(18) すでにこぼれた一寸ばかりの虫がてんでん座敷を這っている（『戦後名詩選』）

(17)(18)における「点々」は、「走る」・「這っている」という動きの継続している期間内にも存在のあり方が「点々」であることを表している。それに対して、

(19) 伐られた木材は山中に点々として置かれている。（『森の仕事と木遣り唄』）

(20) 積んでいたダンボール箱などはあちこちに放りだされ、中味の食料が点々と落ちている。

（『マンダラ探険』）

(19)における「点々」は、動きと関係なく、「木材」があちこちに散在していることを表し、存在によって付与される状態を表現している。(20)における「点々」は、「食料」があちこちにあることを表し、動きの継続している期間内にも存在のあり方が「点々」であることを表現している。一方、「点々」は「食料」の「落ち方」を描く表現だと考えられる。

このように、中国語と同じ、「点々」は動きの最中のものの存在のあり方が表れる一方、動きと関係ない空間内に存在するものの様子と存在のあり方も表現できる。しかし、日本語において、動きの最中のものの存在様態を表す時に、中国語のような制限を受けていなく、より広い範囲の動詞と共起できる。

4 まとめ

本研究は、コーパスから収集される用例に基づき、意味、用法、コロケーション、の3方面から日中両言語における「点々」を比較・分析するものである。

意味的に、日中両言語における異なる点は、①中国語の“点点”が修飾する語は「小さい」という素性を持たなければならないこと、②中国語における“点点”は存在しているものの位置関係が指定されていないこと、の2点である。構文的には、日中両言語における異なる点は、①日本語には、連体修飾語用法が殆ど使用されていないこと、②動きの最中のものの存在のあり方を表す時に、日本語がより広い範囲の動詞と共起できること、の2点である。

参考文献 日本大辞典刊行会(2000)『日本国語大辞典 第二版』小学館 羅竹風(2011)『漢語大詞典』中国上海:上海辞書出版社

調査資料 「北京大学中国語中心コーパス」/国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』